

# 持続可能な観光振興のあり方をめぐって ～新型コロナウイルス前後の比較検討～

大沢 佑佳

## 【要旨】

政府の観光立国政策の結果、訪日外国人観光客は増え続け、インバウンド観光需要は日本経済を支える柱の一つとなった。しかし、新型コロナウイルスによって観光業界は大打撃を受け観光のあり方やその方向性は大きく変わった。コロナ禍以前にはオーバーツーリズムが観光地の課題であったが、コロナ発生以降は、観光需要回復のため3密回避といった感染予防を伴う観光客の呼び込みが主な課題となった。

そこで、本論文では持続可能な観光の実現に向けて、関連する諸概念を用いてコロナ禍前後での観光地の事例分析を行う。分析の結果、「持続可能な観光振興」の条件として、感染防止対策の徹底、観光地の混雑や過密を予防する調整・行動管理、マイクロツーリズム(近場観光)の振興、レスポンシブル・ツーリズム(責任ある観光)の喚起などの重要性を明らかにした。さらに当面取り組むべき「今あるべき観光の姿」を提示し、そのための具体的アイデアを提案する。

## 【講評】

コロナ禍の前後で観光産業のあるべき姿または観光産業の持続的成長を、現実の事例を捉えながら多角的な視点から分析、検討している点は高く評価することができる。また、多角的な視点から分析され、導かれた「レスポンシブル・ツーリズム」、「近隣観光の振興」、「観光地の混雑や過密を予防する調整・行動管理」などのインプリケーションは、現実の実践応用可能な知識としても評価することができる。ただその一方で、より独自性のあるイブリケーションを引き出すためには、より厚みのある理論研究および事例研究が必要であったと考えられる。例えば理論研究も観光に関する文献だけではなく、マーケティング、戦略、サービスなどの多様な分野の文献を渉猟することで、各事例をより一層多角的な視点から捉えることが可能になり、より厚みのある事例を記述することが可能であったと考えられる。本稿には、以上のような長所と短所を持つが、長所と比較する時、その短所は軽微であり、論文の優秀性を損なうものではない。